

『絵』は、マルチメディアである。

前編

光を感じる『めだま』、像を結ぶ『めだま』

一世を風靡した『帝都物語』の作者、荒俣宏さんは「世界大博物図鑑」の著者・編者でも美術者でもない！でもある。大量の図版を手に入れるために、自費で図鑑を買い集め(数億円の出)、時間を惜しみ出版社で寝起きしたという(「住み込み」生活、20年)。テレビやマスコミにも登場の多い有名人だが、実はいままだ「謎」に包まれている。

超多忙な執筆の合間を縫って、「めう」と巨体を顧した荒俣さん、聴き手が持っていた本を覗き込むと、インタビュースるまでもなく話は始まった。

じろじろと見る目玉

僕ね、文章だけの本では物足りないんです。読むだけでなく、見ることもしたい。基本的にビジュアルとか画像とか大好きな、目玉型の人間です。いろいろな「絵」を見るんですけど、「鑑賞」はしないんですよ。「観察」をするわけです。

鑑賞は「愛でる」ことです。たとえば下着とか、肩の凝びとかには興味を向けたいけない。けれど、「観察」は遠慮がない。見せた



くないところもじろじろ見る。観察すると、たくさんのが見えてくるんです。

一般に、われわれは文字文化をつくったことで、人間らしくなれたと考えられていて、確かに文字も大事なんですけど、でも「絵」にも、かなりのこだわりを持っていきますよね。で、よく考えてみると、絵を描ける生物って、人間以外にほとんどいないわけです。さまざまな身体表現はするけれども、二次元に「べらっ」と描いて表現する生物って、人間以外には、まずいない。

では、人間の絵に対する反応ってどういうことなのか。実は、これ昔から、とても気になっていた問題でした。

いろいろ回り道をして、最近やっと、自分なりになんとなく、こうかなっていう帰着点みたいなものが見えつつありまして。自分なりですから、とても一般的にはいかなんですけど、ちょっと話してみましようか。

夜の海—浮遊系ダイビング—

「絵」が存在し、表現の形式として成立するのは、やはりわれわれに「眼」があるからじゃないかって、気づいたんです。絵の問題って、結局は人間の「めだま」の問題じゃないかと。それで、遠回りですけど、人間にとって「めだま」の機能が、どういう意味を持っているのかを、考え始めたわけです。

そうすると、まず気になるのは、絵を描かない生物にも「めだま」があることです。なぜ地球の生物は、人間だけではなくて多くの動物に「めだま」があるんだろうか、逆に植物にはなぜ目玉がないのかって、これ相当いろいろ研究してきて、ようやく最近になって、気づいたことがあります。

わたし、ダイビングをするんですけど、最近のダイビングでは、綺麗な海の中で綺麗な珊瑚を眺めるなんてことせずに、夜中の真っ暗な海に潜るのが、流行ってるんです。これがまた、宇宙に放り出されたようで、なかなか凄い体験ができるんですよ。

で、何を見るかというブランドンなんです。これが流行りまして「浮遊系ダイビング」といって、

あらまた・ひろし | 1947(昭和22)年、東京生まれ。博物学者・小説家・翻訳家。慶応義塾大学を卒業後、コンピュータプログラマーとしてサラリーマン生活を送るがたむら、雑誌『怪奇と幻想』(東月社)を編集。英米幻想文学の翻訳・評論と神祕学研究を続ける。独立後に取り組んだ小説『帝都物語』シリーズ(角川書店)は350万部のベストセラーとなり、1987年に日本SF大賞を受賞。1989年『世界大博物図鑑第2巻-魚類』で、サントリー学芸賞を受賞。そのほか『女演劇家グアダ・ヴィーイナと『謎のモデル』-アール・デコのうめれた美女画-』(新書館)、『国内異界美術誌 幻想と真相のはざま』(KADOKAWA/角川書店)など著書多数。

荒俣宏
Hiroshi ARAMATA